Research on senior citizen's going out characteristics in Higashihiroshima city

Hiroki KAKUTANI

Synopsis
In this study, whether it is sending what kind of life, as old people makes the house of the self to be a base in present age which becomes the car society, is grasped. Especially, the actual condition is grasped by the attention to the action of old people in his house outside. With it, the old people makes that measures for the sake are clarified with the expectation of the opportunity of the action in his house outside increasing in future more, to be a purpose.

Keywords: old person, behavioral characteristics, car society, moving device, length of his stay
めの方策を明らかにすることを目的としている。

2. 研究の方法
東広島市内の町丁目・大字を区域単位として、高齢化率を算出し、その中から高齢町丁目を選定してアンケート調査を行った。調査方法は、当該区域内の世帯を 100%と 50%の 2 種類の確率でランダムサンプリングし、調査対象世帯を直接訪問し調査を依頼し数日後に回収するという訪問依頼留置自記式により行った。そして、調査実施期間は、2009年11月19日〜12月16日の約30日間である。アンケート調査結果を表-1に示す。

3. 調査対象地区的選定と地区的高齢化率
調査対象地区的選定は、図-1、表-1 に示すように、平成の大合併前の東広島市域を構成する基本4町において高齢化率が高い順に各町それぞれ1箇所以上を選定するという考え方で進めた。その結果、6つの町丁目・大字となった。対象6地区の高齢化率をみると、今回最も低い地区（土与丸三丁目=25.7%）でも全国平均を上回って高い。また、最高と最低の地区の間では25ポイント以上のひらきがあり、高齢化率のバラツキは大きい。対象6地区の高齢化率の平均は31.9%であり、全国平均より約10ポイント高い。最高の地区は西条町内にある土与丸六丁目（52.5%）であり、これは「限界集落」とされる地区となっている（表-2）。

4. 高齢者における普段の外出行動
4-1. 出外頻度
外出頻度を見る前に、高齢者の最近の体調をたずねた結果についてみると（図-2）。対象とした世帯の半数以上（56.7%）が「元気に暮らしている」状態となって

図-2 世帯の最高齢者の健康状態

表-1 アンケート調査の配票・回収結果

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>世帯数</th>
<th>配数</th>
<th>配票率（%）</th>
<th>回収</th>
<th>回収率（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>百合町内町</td>
<td>128</td>
<td>64</td>
<td>51</td>
<td>79.7</td>
<td>45</td>
</tr>
<tr>
<td>土与丸三丁目</td>
<td>18</td>
<td>13</td>
<td>6</td>
<td>3</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>土与丸六丁目</td>
<td>12</td>
<td>9</td>
<td>7.5</td>
<td>0</td>
<td>75.0</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>158</td>
<td>94</td>
<td>75</td>
<td>19</td>
<td>79.8</td>
</tr>
<tr>
<td>八本松町吉川</td>
<td>340</td>
<td>170</td>
<td>130</td>
<td>76.5</td>
<td>121</td>
</tr>
<tr>
<td>古志町内</td>
<td>113</td>
<td>68</td>
<td>45</td>
<td>60.2</td>
<td>60</td>
</tr>
<tr>
<td>高屋町貞重</td>
<td>72</td>
<td>72</td>
<td>64</td>
<td>89.7</td>
<td>80</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>683</td>
<td>449</td>
<td>316</td>
<td>133</td>
<td>70.4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

表-2 調査対象地区的高齢化率

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>面積 (ha)</th>
<th>人口</th>
<th>高齢化率（%）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>百合町内町</td>
<td>4.3</td>
<td>431</td>
<td>155</td>
</tr>
<tr>
<td>土与丸三丁目</td>
<td>4.0</td>
<td>70</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>土与丸六丁目</td>
<td>4.7</td>
<td>141</td>
<td>74</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>13.1</td>
<td>642</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>八本松町吉川</td>
<td>989.6</td>
<td>1001</td>
<td>270</td>
</tr>
<tr>
<td>古志町内</td>
<td>1175.4</td>
<td>39</td>
<td>138</td>
</tr>
<tr>
<td>高屋町貞重</td>
<td>150.6</td>
<td>235</td>
<td>60</td>
</tr>
<tr>
<td>小計</td>
<td>2315.6</td>
<td>1627</td>
<td>477</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>2328.7</td>
<td>2269</td>
<td>724</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*人口は2005年の国勢調査（町丁別データ）を参照した
ている。それ以外の約4割の高齢者が「通院」や「薬で体調を維持している」などとなっている。

まず、当該世帯における最高齢者の外出頻度についてみると（図-3）、4割程度（42.3％）が「ほぼ毎日」家から出かれている。次いで、「週に2～3回」（34.2％）、「週に1回程度」（13.3％）などとなっている。そして、「週2～3回」以上の頻度で外出している人たちを合わせると8割近く（76.5％）となる。さらに、低頻度の週に1回以上程度で、家から出かれているか否かを問わせると9割近く（89.8％）となる。高齢者の地元の多くが外に住むものの、後期高齢者（75歳以上）になると、ほとんど家から出ていないうち（割合は5％と多くない）がみられる。他方、家族人数別に外出頻度をみると（図4）、一人暮らしの場合には、「週に2～3回程度の外出（41.1％）が多く、次いで、「ほぼ毎日」（31.0％）、「週に1回程度」（20.7％）となっている。ほとんど出かけていないという人は一人暮らしの場合は少ない。最低でも月に1回は出かけていているようになっている。一人暮らしたと知ることができる家族が同居していないため、ほとんど全ての用事を自力で処理しなければならない、このような感じがする。他方、3人や4人世帯のように高齢者のほかに親族などの同居家族が想定される場合には、高齢者がほとんど外出していないという割合も少なくない。また、5人世帯になると、「ほとんど出けていない」人が1割以上（2/18）あり、家族人数別では最も高い割合を占めている。在宅ではないサービスなどだと自身が外出することが前提となる。それ以外の殆どの行為については、高齢者が外に出かけなくても、家族の誰か代わりに用事を済ませてくれる。例えば、買い物に出かけてくれたり病院に薬をもらいに行ったりなどの用事がイメージされる。家族内におけるこのような生活分担行為が関係していると思われる。年齢別の外出状況にもみられたように、高齢者は、主体として高齢化によって身体が徐々に弱まっていく、それについて自然と外出する頻度も減じてきている様子がうかがえる。さらに、年齢が高くなると用事や買い物など他の家族に任せてしまう、全く外出しなくなってしまうという具合に負の連鎖が起こっているようにも見える。

図-3 世帯最高齢者の外出頻度

図-4 世帯最高齢者の外出頻度（家族人数別）

4-2. 移動手段（介助用具）

移動手段は、図-5、6にみられるように、高齢者の普段の外出行動の多くは車によって賃貸されている。全体として、年齢や家族人数などの関係にはそれほど強く影響されていないようであり、外出時には車に頼るケースが多くなっている。しかし、車利用率は、74歳以下において6割以上を占めて多いが、75才以上になると、半数以下に減っている。これは、現在がいわゆる車社会であるが故にその恩恵を受けていている結果であろう。しかし、その一方で、「移動手段について、車を運転できなくなってからが心配である」という意見が SPORT(62.5%)、一般(57.1％)、高齢者(57.1%)において多くみられた。高齢者は、何事に対してもひかえず精神状態と体力状態になっている。そのこともあって、車以外に色々な移動手段をもつ状
況におかれていない。そのため、やむなく車を中心的な移動手段となっている。病院や買い物をするときと同じように、移動手段についても、複数の手段から選択できる、という状況が必要である。そのため、高齢者が車を使えなくなったときのために、公共バスが運行されることなどによって、高齢者の外出がよりスムーズに行えて増大していくことが期待される。

図-5 年齢別の介助対象

4-3. 潜在時間

高齢者の外出時における潜在時間は、1日平均「1～2時間」ないし「3～4時間」としてから短いように思われる。これだと、高齢者は、1日のうち、午前中のみ、もしくは午後に少しだけ外出して、目的を果たすと、寄り道や回り道をすることなく自宅に戻って来る状況が想起される。また、75歳で1割以上（11.7％）が「家から出ていない」としていて気がかりな点である。外出場所のところでも述べたように、高齢者が買い物に出かけたついでに立ち寄る場所や、散歩がてらに気軽に寄り道ができるようなところが必要であると望まれている（図-8）。

図-7 年齢別外出場所

4-2. 出外場所

高齢者の外出場所としては、病院や地域（農作業）、商店（買い物）などがほとんどである（図-7）。家の周りを散歩するために外出している人もいるが、特に親に用事のない場合には家の中を歩かずにいたせている様子がうかがえる。また、自宅の近くに希望する施設として「集合所がほしい」とか「懐い場面がほしい」との意見がある。これは、高齢者が気軽に寄り集まる場所が地域にあれば、立ち寄るこ
5. 外出時における不満
高齢者が外出する時に「家から遠い」と感じている施設は多くない。むしろ、「感じていない」人がほとんどで、不満が目立つ程度の施設は少ない。しかし、年齢差によって少しだけ気がかりな、高齢になるにしたがって、病院に行って治療を受ける機会が増えてくるため、病院や病院が家から遠いことに対して不満を感じることが多い。高齢者にとって、健康維持や体調維持のために、医療関係施設の位置は気になる条件になっている。小さな診療所であっても、自宅の近くにいれば今とは無理なく頻繁な外出行動をとるようになっていることが予想される(図-9)。

6. まとめ
①高齢者の外出行動は、すでに極限にまで到達している現状の車社会の影響を強く受け、外出のための移動手段として車に頼っている状況である。そのため、車以外の移動手段はそれほど多く使われておらず、しかも高齢者は、車を自分に運転できなくなったときの移動に対する不安を多く抱えている。
また、②地域において、高齢者が寄り集う所や地域の人たちとコミュニケーションをとれるような、これといった場所や機会がない現状に対して、高齢者は不満を抱いている。こういった、高齢者の不安や不満を解消するためには、高齢者が自分で車を運転できなくなっただけの移動手段（公共交通機関）をいかに確保していくかということも重要な課題とされる。他方、徒歩でも、目的とする施設に容易に到達できたり、安全に外出ができるような配慮の下で、コンパクトな施設の配置と、歩行の安定を十分に考慮した道路の整備が重要になる。さらに、歩行の途中にいつでも気軽に立ち寄ることができ、地域の人たちと触れ合うことができる憩いの場が必要とされている。その他、③同居している家族のサポートや配慮が高齢者の外出率にかなり影響しているように思われる。つまり、同居している家族には、高齢者の外出を促進させる働きを担うという大切な役割があるものと思われる。

上に述べたような①～③の指摘がうまく組み合わさって充足されることによって、地域における高齢者の外出行動がより一層魅力的で楽しいものとなり、生活の一部となるものと思われる。
今後は、車社会化のさらなる進行とともに高齢化がさらに進んでいく中で、すべての高齢者の外出行動が容易に実現可能となるよう移動手段およびまちづくりのあり方を探求していくことが課題である。

参考資料
1）椎野雅紀、中村、木下勇、齋藤雪彦：高齢期における余暇外出行動の空間特性に関する研究、第35回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.829-834、2000
2）大場孝：市街における高齢者の居住移動に施設が与える影響の分析、第36回日本都市計画学会学術研究論文集、pp.913-918、2001